OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス植民地下ベトナムにおける初等教育 : 仏越学校現地人教員の活動を中心に
Author(s)	齊藤, 若菜
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2013, 47, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス植民地下ベトナムにおける初等教育

── 仏越学校現地人教員の活動を中心に ──

齊藤　若菜

キーワード：植民地教育／ベトナム／フランス植民地／クォックグー

1. はじめに

本稿は、フランス植民地下ベトナムにおける初等教育を、現地人教員の活動から考察するものである。

フランス植民地時代の教育というテーマは、植民地期やその後のベトナム民族運動史において、また現代につながるベトナムの言語問題においても重要な項目であり、先行研究は少なくない。ベトナムの教育制度史に関しては、ファン（Phan）氏と近田氏（Phan Trọng Báu. *Giáo dục Viêt Nam thời cận đại.* 邦訳『近代ベトナム教育』、近田政博『近代ベトナム高等教育の政策史』）、フランス入植前後の村落における教育や知識人の役割については、嶋尾氏の研究がある（嶋尾稔「ベトナム村落と知識人」など）。仏越学校についてはケリー（Kelly）氏が比較教育学の観点からかなり実態に踏み込んだ分析をしている（Kelly, Gail Paradaise. *French Colonial Education : Essays on Vietnam and West Africa.*）。

以上のような先行研究によって、植民地時代の教育制度や主要な都市の知識人の動向、植民地期以前の村落における伝統的知識人の役割といった基礎的な部分が明らかにされてきた。しかし、これらの研究は、特に教育制度やその実態に関して、フランス語の公文書を主な史料としてきたため、あくまでもフランス側の視点が中心である。さらに、フランスの植民地教育政策が

ベトナム村落にどのように反映されたかは述べられていない。知識人の活動についても、都市のエリートが村落にいる大多数のベトナム人にどう影響を及ぼしていたのかがよくわからない。そのため、植民地下ベトナムにおける教育の全体像をつかむためには、制度と村落の実情の中間に存在し、都市出身のエリートでありながらも、村落に直接影響を及ぼすことができる教員の立場・活動を考えることは意義がある。

そこで、本稿では、植民地期のトンキン・アンナン村落における「漢文先生」の役割をふまえつつ、仏越学校現地人教員の立場や活動に着目する。それにより、教育制度史、民族運動史において見落とされている、漢字漢文的知識や、多様なベトナム知識人の活動の新たな一面について検討することが可能になる。上と下、そしてそれをつなぐ「教員」の実際を明らかにすることで、フランス植民地下ベトナムにおける教育の全体像を把握する手がかりとしたい。

なお、本稿で「北部／南部」と二分して指す場合は、「北部」はトアンティエン・フエ省などの北中部地域を含めた北側の部分をさし、「南部」と指す場合は、それ以南を指すとする。「北圻／中圻／南圻」と三区分して指す場合は、それぞれトンキン、アンナン、コーチシナを指す。

伝統的な知識人の影響力が強い北部と、直轄植民地である南部とでは行われた教育政策はかなり異なる。本稿では、主に北部における教育に注目する。ベトナムには54の民族が存在するが、ベトナムの多数派の民族であるキン族に対する植民地教育史を扱う。また、「村落」、「村落共同体」と述べる場合も、北部のキン族のものを基本とする。

2. 伝統的儒教教育と漢文先生

まず、フランスがベトナムに持ち込んだ教育や、それにともなって生まれた仏越学校現地人教員について考える前提として、科挙制度に対応したベトナムの伝統的な教育や漢字漢文知識がどのようなものであったか、また、仏

越学校現地人教員と対比されうる漢文先生の村落内での立場や役割を確認したい。村落の実情についてはベトナム北部・紅河デルタのナムディン省バックコック社（Bách cốc百穀）で行われた聞き取り調査のデータを利用して考察する。[1)]

ベトナムにおける科挙の歴史は長く、その始まりは中国による北属期（前111～966年）に遡る。阮朝（1802～1945年）における科挙に関しては、予備試験と「郷試」、「会試」、「殿試」の三段階の本試験で構成されている。郷試に合格すれば「挙人」、わずかに届かなければ「秀才」の称号が与えられる。会試に合格すれば「正傍」、最終試験である殿試に合格すれば「進士」の称号が与えられる。どの試験であれ、本試験の合格者は官吏の職につけるため、科挙は教育と権力・地位をストレートに結びつけるものであった。また、各地から受験者が集まるので、科挙は村落レベル、省レベルを超えた知識人のネットワーク形成の機会ともなっていた。

そのような科挙に応じて、フランス入植以前には以下のような教育が行われていた。阮朝時代の教育機関は、フエの国子監を頂点に宮廷が管理する官学と、村落においてオンドー Ông đồ、タイドー Thầy đồ と呼ばれる先生が自身の家などを利用して開く私塾があった。官学に通うのは限られた人々[2)]で、一般の人々は私塾に通っていた。オンドー、タイドーは科挙において秀才以上の称号をもつ人で、会試や殿試の不合格者、または旧官吏である。これらのオンドー、タイドーを本論では「漢文先生」とよぶ。漢文先生の多くは初歩の漢文を自身の村落で教えているが、有名な漢文先生は他の村まで教えに行くこともあった。本試験を目指すレベルになると、生徒は挙人以上の称号をもつ漢文先生のところ、または官学に通った。

学習には、『三字経』、『幼学五言詩』、『天南四字経』、『史地』などが教科書として使われていた。文字を習い、宿題として課題文（課文）を覚え、先生の前で暗唱する。学習の中心はとにかく暗記することであった。マー（Marr）は、これらの儒教的教育の成果として、19世紀において15歳以上のベトナム人の25％は数百の漢字やチュノムを理解できたと述べている。[3)]

では、その識字率を支えていた漢文先生の立場を確認する。注目すべきは、漢文先生らは、村落共同体の中で最高位である「職勅」という等級に位置づけられていた点である。[4] 岩井氏は彼らが最高位に位置していることから、財力のみならず「儒教モラルがベトナム村落社会の社会的規範の支柱となっている」[5]と指摘している。民間レベルでは、儒学以外にも、医学、風水、占いといった「医儒理数」を担うことが期待されていた。例えば、村民は病気になったときに、薬学の知識のある漢文先生の家に薬をもらいに行き、先祖の墓を探すときも漢文先生の占いを頼っていた。ディン（亭）[6]を建設する際の対聯の作成や家譜の作成も、漢文先生の仕事であった。

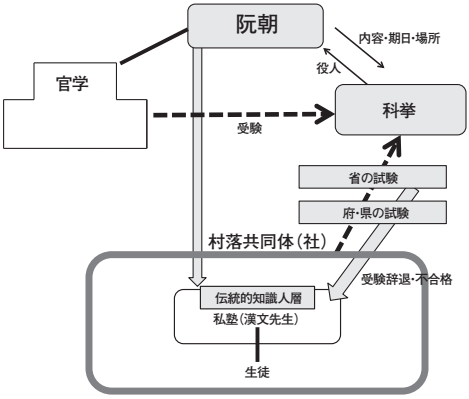

図1：フランス入植以前の科挙と教育機関の構図

聞き取り調査からは「学費は、それぞれ自発的に渡す。テトには先生にお礼をする。先生の家の命日にもお礼をする（『百穀社通信』第11号BA氏）。」「（漢文先生であった自分の父は…筆者補足）xom内に家庭問題が発生すると相談されアドバイスを求められたり、祭礼の際に指導した（同第12号Nguyen Van Quynh氏）。」「先生は貧しかったが、大変尊重された。道で先生に会ったとき、非常に丁寧に腕を組んで挨拶をした（同第11号NN氏）」というように、漢文先生と他の村民のつながりがわかる。また、高い等級が

与えられ、尊敬されてはいるが、決して裕福なわけではなかったこともうかがえる。授業料という金銭的なつながりというよりは、精神的なつながりが強く、村落において大事にされ、頼られる存在であったといえるだろう。フランスの入植期には、漢文先生は真っ先に反仏武力抵抗運動母体となり、科挙を通じて形成されたネットワークを利用して地方反乱を全国規模にまで押し上げた（勤王運動）。そのため、漢文先生らの存在はフランスにとっても脅威であった。村落共同体やフランスにとっての漢文先生は、科挙知識を以て勉強を教える単なる「先生」ではなかったのだ。

3. フランスによる植民地教育政策 ——仏越学校教育の確立

仏越学校現地人教員らを創出し、彼らが「正しく」伝達することを期待された「仏越学校教育制度」はどのようなものだったのだろうか。

世界に広がっていた植民地の中でもベトナムは本国から遠い上に、フランスの財政不振も加わり、フランスは大量の本国人をベトナムに送ることはできなかった。ベトナムにおける植民地経営は間接統治をとり「フランスの文明」を理解する現地人官吏の養成が急務となった。そのような状況の中、フランスの対ベトナム教育政策は通訳学校の設立からスタートした。その後、カンボジア、ラオスを含むインドシナ連邦で統一的な教育政策を行うために、1905年にハノイを中心として公教育局（Direction générale de I'instruction publique）が設置され、翌年には行政官以外の幅広い職種の人々を集めて議論するために「現地人教育改良評議会（Direction générale de I'instruction publique）」[7)]が設置された。この評議会を中心に、科挙を軸としたベトナム式教育に対して、段階的に植民地教育改革が行われることとなる。1917年には学政総規が発布され、ベトナムにおける現地人教育は「仏越学校教育制度」なるものに一本化され、1930年頃にようやく基礎が固まった。フランスの入植から1930年代にかけての教育改革の特徴は、特に北部にかんして、他のフランス植民地のように、急速且つ大胆なフランス式教育

への転換が行われず、段階的に、時間をかけて改革が行われたことである。フランスは漢文先生を含む文紳層の影響力を低下させるため、教育政策を通してベトナム人を中国・漢字文化から引き離し、新たに西洋文化を据えることを教育の重要な目的としていた。だが、勤王運動に代表されるように、伝統的知識人層らによる反発が強く、伝統的儒教教育システムや科挙をすぐさま廃止するわけにはいかなかった。

仏越学校教育制度における初等教育は6年間となり、最初の3年間の初級課程と、後の3年間の初等課程に分けられた。初級課程から初等課程まで連続して行う初等学校は都市にしかなく、各省に平均2～4校程度しか設置されなかった。中等教育は4年制の高等小学校と、その上の3年制の中学校である。高等小学校では主に職業教育を受ける。高等教育はハノイのインドシナ大学が担っていた。

基本的にフランス語の使用は初等課程からだったのだが、初等学校は都市にあるため、在越フランス人も比較的多く、初級課程の三年間からフランス語教育が行われることもあった。そういった意味で、地方にある初級学校から、都市の初等学校の4年目への進学は、かなり困難であった。ケリー氏はこの制度の中で、三年以上の公教育を受けることができるかできないかで、地方／都市、エリート／非エリートの差別化がなされたことを指摘している。[8)] 初等課程以上の仏越学校制度がエリートのためのものであった例として、初級学校の1年目の入学者が112,920人（1929年）であったが、初等学校の4年目に在籍できたのは、6,754人（1930年）であり、約6％にすぎない。さらに、6年間の初等教育を終たのは、1,642人(1932-33年)と、0.014％となる。[9)] ベトナムは、フランス植民地の中でも、初等教育から高等教育まで設置された珍しい例だが、その大部分は初等教育であり、その中でも3年未満の学習者がほとんどであったことがわかる。

初等教育の教員資格は、高等小学校の師範科を出たものに与えられる。主にベトナム人教員が初等教育を担っていた。中等教育では、中学校や大学において教員資格を得ることができたが、フランス人教員が多数派であった。

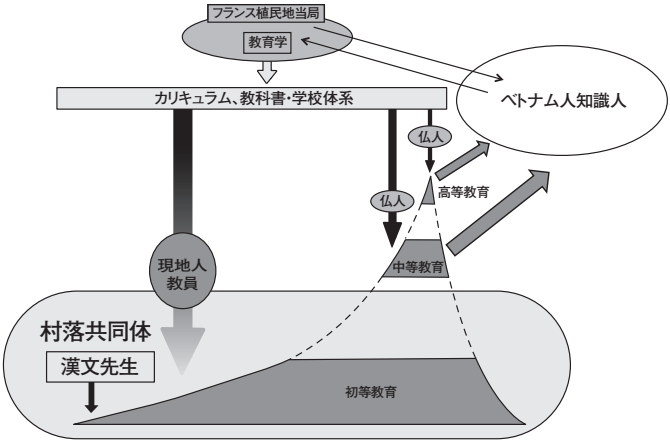

図2：仏越学校体系の概念図

初等教育のカリキュラムは、語学学習に集中していた。初級学校では、一週間の27時間の授業時間のうち、9から15時間がベトナム語の学習にあてられた。初等学校においては、15～18時間が語学の時間で、そのほとんどがフランス語学習であった。その他は、衛生学、科学、数学、倫理、物理、歴史、地理などの授業が行われた。言語学習で扱われる内容は、ベトナムの生活に関することが中心であり、村落生活や、共同体のつながりを重要視する記述や、伝統的な稲作を奨励する記述が多かった。しかしその描かれ方は、あくまでもフランス目線から見たベトナムであったとケリー氏は指摘している。例えば、テキストには迷信的なベトナム像が描かれており、子供が病気になったら、女性（母親）が殴られる、ベトナムの家族は父親によって独占的に支配されているといった内容である。[10)]

学政総規発布の前後から、新聞や雑誌に仏越学校での教授内容の解説が掲載され始めた。それらは教育局の検閲のもと、ベトナム知識人らが書いたものである。トンキン・アンナンにおいて広く読まれた*Đông Dương Tạp chí*（邦訳『インドシナ雑誌』）[11)] にも「国家が我が南国（ベトナム…筆者補足）に新学を導入したために、多くの先生たちも新しい方法で教えることになった。先

生たちは勉強しなければならず、そうしてようやく生徒によりよく教えることができる。また、クォックグーの書物はまだあまりないので、我々はこれらの記事が、雑誌をみた多くの先生たちの助けになることができると確信している。」[12]という言葉から、カリキュラムの解説が始まっている。[13]

4. 都市ベトナム知識人の活動と村落における実態

次に、仏越学校現地人教員の活動の特徴や、彼らの独特な立場や活動を創出した背景を考える前提として、植民地教育政策によって、どのようなベトナム知識人が創出されたのか、また実際に村落にはいかなる変化があったのかを検討したい。

近代的な学問（新学）をベトナムに持ち込んだフランスの植民地教育政策に伴い、1910年頃になるとフランス語や、クォックグーで知識を伝達し合う新学世代が現れた。代表的なのが『インドシナ雑誌』の主筆であったグェン・ヴァン・ヴィン（Nguyễn Văn Vĩnh 1882-1936）や雑誌『南風 Nam Phong』の主筆を務めたファム・クィン（Phạm Quỳnh 1892-1945）らである。彼らは、雑誌を通じて、さかんにクォックグー論争を展開した。当初、漢字に対して低俗とされていたクォックグーはこの間に漢字・漢文からの語彙の取り入れや和製漢語の導入によって磨かれていった。また、クォックグーは漢字やフランス語に比べて習得が容易なため、ベトナム独立運動の指導者であるホー・チ・ミン（Hồ Chí Minh 1890-1969）もクォックグーを「我々の文字」として識字運動を行い、その識字運動はインドシナ共産党に引き継がれていった。こうした都市の知識人らによって、識字運動とベトナム民族独立運動はひとつの「クォックグー・ナショナリズム」として展開された。彼らがナショナリズムの武器としたのは、これまで使われてきた漢字・漢文ではなく、元々は布教や植民地政策の武器であったはずのクオックグーであったことは興味深い。また、都市の知識人層は、文字、言語を「ベトナム」ナショナリズムの象徴とするべく、より統一的で均質なクォック

グー、ベトナム語を求め、推奨した。

一方、村落の状況はどのように変化したのだろうか。北部村落、バックコック社への聞き取り調査の事例から、教育に関する質問に対するインフォーマント81名（1910～1947年生まれ）の回答をもとに考察したい。[14] 彼らの学習経験のパターンは、漢文先生の私塾、公立の仏越初級学校、クォックグーを教える私塾、平民学務[15]の主に4パターンであった。これらの81名から明らかになったのは、1917年に制度的には公教育は仏越学校教育に一本化され、科挙もトンキンでは1915年に廃止されているにもかかわらず、かなりの村民が漢文先生のところで漢字漢文を学習していることである。81名のうち、何らかの学習経験をもったのは59名だが、1917年以降も漢文先生のもとで勉強したのは26名で、44％にものぼる。百穀社に学校が建設された1930年以降に限っても、教育機会のあった57名中、漢文先生のもとに通ったのは23名で、40.4％になる。このことから、制度が変わり学習の目的であったはずの科挙がなくなったからといって、漢字漢文学習がすぐには放棄されなかったことがわかる。また、学校を卒業した後に漢字漢文学習を行った例もあるため（第11号BA氏、ND氏）、単に制度の改訂に合わせて、村民が旧学から新学へ移行したともいえない。教育制度が代わり、科挙が廃止された後も村民が漢文先生のもとに通った理由としては、①漢文先生の役割の1つである「医儒理数」が必要とされたこと、②漢字漢文を使える人への権威や神聖さが存続したこと、③クォックグーの普及に伴い、漢字漢文を扱える人への需要が高まったことが挙げられている。これら3点は、現代ベトナムで漢字漢文的知識が必要とされている理由とも一致する。[16]

5. 仏越学校現地人教員の活動

では、前章をふまえ、制度と実態をつなぐ仏越学校現地人教員の特質とその活動に注目しつつ、彼らが目指した教育がいかなるものであったかを検討する。ここでは主に、*Tiếng chuông nhà học*（邦訳『学び舎の鐘の音』以下

『学鐘』）という、1928年から仏越学校の現地人教員の結社によって発行された雑誌を史料とする。

(1) 仏越学校現地人教員をとりまく状況と教員結社の結成

3で述べたように、仏越教育制度のうち現地人教員は主に初等教育（仏越初級、初等学校）を担っていた。教員になるためには、仏越高等小学校を卒業していることが原則なので、彼ら自身は都市で学んだ新学知識人である。現地人官僚のヒエラルキーの中に位置づけられ、フランス当局から給料を支給されていた彼らは、初等教育機関の拡大にともなって、都市に限らず農村にも数多く赴任していった。農村での現地人教員らの様子については、後にふれる現地人教員の結社が発行した雑誌『学鐘』から状況が垣間見える。「もし、ある生徒がその土地の有力者ならば、すぐに教員にかんする悪口が広まる。（中略）違う土地にいった教員は、誰が一緒になってくれるだろうか。その上、どこに教えに行った教員も、その土地の統治権力に耐えなければならない。ある先生は若さゆえ、道中であしらわれたり、様々な不当な行為を受ける（中略）農村にいる教員はこのような困難に遭い、苦痛を感じる。」[17] 記事からすれば、先生といえどもその待遇は決して良いものではなかったのだ。また、これまで村民にとって「先生」とは、村落共同体の運営において重要な役割を担っていた漢文先生であり、若くても30代以上、官吏経験者ならば高齢の人物である。一方、初等教育の教員は、早ければ高等小学校卒業してすぐの15、6歳の若者である。その上、仏越学校の教員は、その村とは関係のないところからやってくる都市の人であり、「先生」として認められるのは容易ではなかったようだ。村落内権力への対処方法を述べた記事や、都市と農村の生活文化の違いの大きさに悩む記事も見られる。「村の長や村の顔役（彼らは村落で力を持っている）に赴いて、いかに学習が大事なのか説明する。（中略）その土地の官員に民衆の協力を求め、府県の生徒にじっくり言葉を選んで説明するのである。」[18]、「府県の生徒は、すぐに大酒宴をひらき、学校を休むことを願いにくる。教員が休みを許可しな

ければ、すぐさま悪印象を与える。」[19]とある。また、「大変なところでは、1クラスに40人の生徒がおり、9人はa、b、cを学び、10人は作文を学んでいて、数十人は読み書きができる。教授の難しさは言うまでもない。騒ぎまくるのを静かにさせるだけでも大変である。」[20]といった状況である。給料はフランス当局から支給されているため、村民にとって教員は、漢文先生のようにお金や食料を援助する対象ではない。その上、村の有力者が勤王運動期における反仏運動の参加者であった場合は、なおさらフランス式教育に不満をもっていただろう。村の有力者に受け入れられなければ、生徒は集まらないばかりか、授業妨害を受けるという状況であった。教員が自分と何らかの繋がりのある村落に赴任したり、教員が村落内の人物と結婚したりと、村民と教員との関係がうまくいく場合もあり、全ての村落で同じ状況であったわけではない。しかし『学鐘』から読み取れる現地人教員の姿は、決して漢文先生のように村落で強い支持を得る存在ではなく、村落内で浮いた不安定な存在であったといえるだろう。

また仏越学校現地人教員の給与は、一般ベトナム人と比較すると高収入であったが、フランス人官吏と比べると雲底の差があった。「初等学校教師の給与は年間最大で30000ピアストルだったが、この受給額はフランス人官吏給与制度では最下級の研修生と同額」[21]であった。エリートでありながら、フランス当局から給与も地位も完全に保証されていたとは言えず、漢文先生が貧しくても尊敬され、村で守られる存在であったのとは対照的に、仏越学校の現地人教員は、身分が危うい上に、職場となった村落にも帰属することは困難であった。第一次大戦後に経済危機に陥ったフランスは、経費削減のために在越フランス人官吏の数を削減し、仏越学校の教員を含む、現地人官吏の給与を減額した。前述したような不安定な存在であった地位に、こうした状況が加わるなかで、植民地当局にも村落共同体にも依存しない(できない)仏越学校現地人教員たちは、1921年に現地人教員結社「友愛会hội hữu ái」を設立したのだった。1920～30年代という時期は、教員以外にも現地人官吏による結社が増加した時期であった。

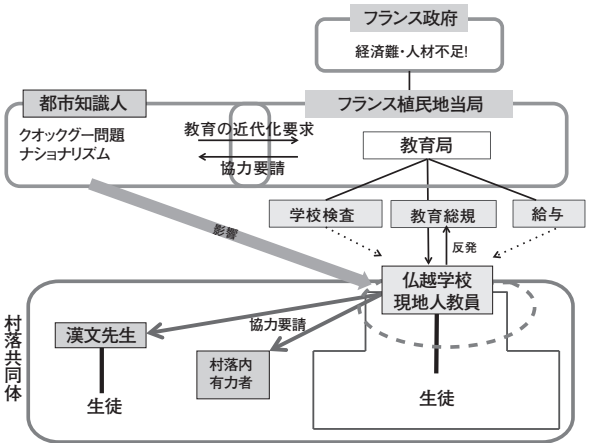

図3：仏越学校現地人教員の立場と当時の社会状況

現地人教員結社は、アンナン、トンキン、コーチシナの3支部に分かれていた。本稿で筆者が分析する『学鐘』は、フエを中心としたアンナン支部（中圻。16省を含む）のものである。アンナン支部は時期によって増減があるものの、当時のアンナンの現地人教員の約30％にあたる約500人の会員が所属していたことが判明している。[22)]

結社結成の7年後の1928年に『学鐘』が創刊され、二ヶ月に一回のペースで発行された。その内容は、教員たちに広く共有されるべき情報を取り扱っており、公教育局によるカリキュラムや給与などの法改正の告知、ハノイで発行された新書の紹介、不定期に開かれる会合の議事録、各会員によって書かれた教育に関する論文などが掲載された。会員による投稿論文には、ハノイを中心に発行されている『南風』などの雑誌上でいかなる議論が交わされているかを引用したものもあり、中圻の教員たちがハノイの知識人の言動に注目していたことも分かる。当時はフランス当局による発行物の検閲が行われていたため、反仏的な内容は見られず、フランスに対する教員の率直な心情までを読みとることは難しい。だが、現地人教員たちのベトナムの教育に対する考えや、村落社会へのまなざしを読みとることは可能である。

なお『学鐘』はフランス語とクォクグーで書かれているが、教員による投稿論文をはじめとするクォクグーで書かれた記事には、中圻の方言が反映され、単語表記にもばらつきが見られるなど、クォクグーが未統一だった状況がうかがえる。

『学鐘』の「会の十周年記念kỷ niệm năm thứ mười của hội」の記事からは、現地人教員結社の活動の軌跡が判明する。教員の労働環境や給与の向上をフランス当局にうったえることから活動を開始したこと、例えば、男女の教員の給与格差の問題、転勤手当や居住手当の問題である。結社の訴えによりそれらが改善されている。また結社は、中圻の台風被害に対する寄付や、学校経費の資金集めなども行うなど、社会的な相互扶助団体としても機能していた。

(2) フランス式教育の適合化・多様化・自立化の試み

では、結社を結成した現地人教員らは、いかなる教育を目ざしたのか。

仏越学校の現地人教員は、雑誌・新聞などのメディアを通して、都市の知識人による言論の影響を受けている。しかし、これまで述べてきた仏越学校教員という立場と現場気質からか、前章4で述べたような都市の知識人とは異なる方向性を示している。例えば、都市のクォックグー論争では、話し言葉と書き言葉は統一するべき、というのが通論であった。しかし、『学鐘』の投稿論文では、ハノイの開智進徳会がクォックグー表記を統一するために『国音辞典』を作成していることを、「全国の人々にとって有益なことである。」と言及しつつも、「もし正確な書き方をするならば、正確な話し方をする必要はない。(中略) 話し方については、正す必要は今後もない。どこにでも方言がある。」[23]との主張があり、北圻の言葉で統一されていた教科書についても、北圻の言葉で勉強して学校を卒業すると、声調などの違いから周囲の人とコミュニケーションが取りにくい上に、自分(のアイデンティティー)を失うと述べている。[24]

当時、都市では「大衆教育」が目指されており、農村でも都市と同質・同

等の知的レベルが求められていた。しかし、投稿論文には、「田舎では村落独自の試験やカリキュラムにするべき」[25]という意見があり、さらに初等教育で農業科目を行うべきだとする意見もあった。[26] また、『倫理教科書luân lý giáo khoa thư』の中に、良い父、良い息子は登場するが、良い母、良い娘が登場しないため、女学校の女性教員は倫理科目を教えにくいとの指摘がある。[27] 1935年の『倫理教科書』には、毎頁挿絵がついているが、挿絵の登場人物は確かに少年ばかりである。その他、絵画の教授法[28]について具体的に指示する論文や、児童に適した昔話[29]は何かといった論文も掲載され、より実践的な内容が扱われている。

以上の論争をもとにして、結社は独自の教育カリキュラム、教科書を作成し使用していた。1927～29年の学校検査では、「未認可の教科書が広がっており、それらの多くは教員結社によって書かれ、発行されたものである。」と報告されている。このような状況から、ケリー氏は「仏越学校の教員はフランスのカリキュラムの正確な伝達者ではない」[30]と表現してる。フランス当局によって認可、制度化されなくとも、現地人教員らによって、学校現場レベルで教育の改変を行うことは可能であったのである。

漢文先生や漢字漢文知識についても、都市の知識人がベトナムナショナリズムに不可欠なものとしてこれらに注目し始める以前から、仏越学校現地人教員はその必要性を主張していた。仏越学校の教員たちは、村落社会における儒教教育や漢文先生の権威を理解しているため、仏越学校にも漢文先生を取り込み、儒教教育や漢字教育を行うべきだと主張しているのである。[31] 漢字語彙についても、新しい言葉を作りつつ古い言葉を残さなければならないとし、その方法として、漢字やチューノムを研究するハンノム院の創設や、チューノムの辞書や専門用語集の作成などをその方法として提案している。特に古い言葉を残すためには、ベトナムの慣習に関する本の編纂や翻訳、または先賢の国文の文献に注釈をつけるといった作業が必要だとの主張もある。[32]

また、仏越学校の教員たちは村落の教化の使命を負っていることを自認し

ていた。「我々の責任 Trách nhiệm của ta」と題する投稿論文では、児童との飲酒の悪弊についてのやり取りを掲載し、「このように、子供は遠くも深くもみえておらず、表面しかみえていない。（中略）我々の使命は子供たちに正しい道を指導し奈落の底に落ちるのを防ぐことだ。」[33)]と述べている。

以上の例からも、現地人官吏の一種である仏越学校現地人教員が、単なる新学・フランス崇拝者ではないことが明らかである。フランス式カリキュラムに依拠しながらも、仏越教育制度の末端レベルで、ベトナムに必要な教育のあり方を模索し、フランス式教育のベトナムへの適合化、地域差に対する教育の多様化を目指していたといえるだろう。その上、フランスの教育統制は厳密なものではなかったので、フランス植民地当局から制度化・認可されなくとも、学校現場での教育内容の改変は十分可能であった。つまり、仏越学校現地人教員らの目指した教育は、初等教育レベルではかなり実施されていた可能性が高い。また、ベトナムが民族独立運動に向かうこの時期に、三圻をつなぐ教員の横のネットワークが結社を通じて形成されていたことは注目に値する。

仏越学校現地人教員らがこのような活動を志向した要因として考えられるのは、初等教育の拡大にともなって、彼らが都市にとどまることなく、各農村部にも赴任したことである。そのため、都市の知識人と同様の、画一的で政治的な識字運動ではなく、ベトナムの現状に必要な教育の中身について議論することになったのである。また、漢文先生らを旧態依然の存在としてのみ捉えるのではなく、その権威を利用した教育の普及を試みた点も、現地人教員らがベトナム村落の実態を把握していたことに由来するだろう。また、カリキュラムの改変が実施し得た背景としては、ベトナムは他の植民地と比べて植民地における植民者の数が極めて少数であり、フランス人教員に対し現地人教員が圧倒的多数であった点が挙げられるだろう。この点が、仏越学校現地人教員らがフランスから強制された植民地教育制度の枠内においてでさえ、結社を結成することで集団化し、一定の発言力と影響力をもつことができた要因の1つであると考えられる。

6. おわりに

フランス入植以前の北部ベトナムでは、科挙を軸に学業が規定され、地位が担保されていた。そのため、幅広い階層の人々が漢文先生の私塾に通い、漢字漢文的知識を享受していた。漢文先生は、知識の伝達者であり使用者であったため、信頼・尊重され、村落で重要な役割をになっていた。

19世紀末からの近代的な学問（新学）の導入によって、科挙を中心としたベトナムの伝統的な学校体系は、フランスにより段階的に改変されながら最終的に廃止に追い込まれた。フランスはそれと引き換えに、近代的な教育に基づく仏越学校制度を確立した。その中でクォックグー識字運動は新学知識人からベトナム共産主義者に引き継がれ展開した。それに伴い、新たに「民族の文字」とされたクォックグーによって、「ベトナム的」な知識・文化・思想が生産された。これらの大衆識字運動や民族独立運動におけるベトナム語・クォックグーは、三圻で統一されたものが求められた。

フランスによって教育内容が規定され、都市の知識人層によってクォックグー伝播活動が行われる中でも、村落（北部のバックコック社の事例）では、制度の改変に伴い、村民が単純に漢字漢文教育から切り離されたり、それを即座に放棄するという状況は見受けられなかった。また、特に村落においては、漢字漢文的知識が完全に葬り去られることなく、現在に至るまで医学、占い、祭祀などの場面で受け継がれている。それ以外にも、ベトナム国家大学ハノイ校人文社会化学大学歴史学部やハンノム研究院といったベトナム史、古典文学などの研究機関を中心に、漢字漢文知識を専門的に扱える人材が求められ、養成されている。つまり、フランス植民地時代に、現代にまでおよぶ漢字漢文的知識、「ベトナム的」知識、西洋的知識の三角関係が形成されていったといえる。

植民地教育制度、都市知識人層の活動、村落の状況を確認した上で、本論はそれらの中間に存在する仏越学校の現地人教員の活動に焦点をあてた。その結果確認できたのは、仏越学校の現地人教員たちが、フランスによって

完全に統制された、「文明化の使命」の「担い手」、あるいはフランスのカリキュラムの「伝達者」として機能していたのではなく、フランス式教育のベトナムへの適合化や地域に合わせた多様化を試み、実施していたことである。仏越学校現地人教員らは、赴任先の村落に埋没することなく、現地人教員の結社を通じて横のネットワークをつくり、都市の知識人らの影響を受けつつも、彼らとは一部方向を異にする第三勢力として活動していたといえる。

今後、仏越学校現地人教員による活動が、ベトナムの民族独立運動にどう影響を及ぼしていたかを明らかにする研究が必要になるだろう。構成員に教員が多かったと言われるベトナム国民党との関わりや、教員結社のメンバーのその後の活動からなどからそれらを明らかにし、現地人教員の活動をフランス植民地期からベトナム民主共和国期まで連続して考察することで、彼らの活動の歴史的意義をより明確にできると考える。

［注］

1） この調査は桜井由躬雄氏らにより1992～2006年に行われ、成果は『百穀社通信』（全13巻）として刊行されている．教育に関する質問への回答部分を利用した。
2） 国子監には皇子と皇族の子弟である「尊生」、高官の子弟である「廕生」、地方の教育当局の推薦を受けた「貢生」、会試を受験する「監生」などが通った（［坪井1991］、164頁参照）。
3） [Marr 1981], pp.34-35.
4） 科挙は、受験者の階層や出自を問わないので、このような村落共同体内の等級の壁は、生まれつき超えられないものではなかったといえる。
5） ［岩井1992］、68頁より引用。
6） 村落守護神の神社。村の集会場もかねる（『ベトナムを知る事典』大西和彦担当「ディン」の項目より引用）。
7） メンバーは、議長・副議長2名、書記以外に現地人約10名を含む最大25名の評議員で構成された。
8） [Kelly 2000], p.76.
9） [Tran 2011], p.305.
10） [Kelly 2000], p.14参照。
11） 南部で発行された『六省新聞』の特別版として北圻と中圻で1913年～1919年まで、毎週木曜日に発行された。主筆はグェン・ヴァン・ヴィン。インドシナの経済、時事

ニュース、文学などを扱う。

12）“Tiêu-dẫn”, *Đông Dương Tạp chí,* số 42, 1914引用。

13）*Nam-học niên khoá*

14）前掲『百穀社通信』第8～12号。

15）1945年から展開された、成人向けの識字教室。

16）現在ベトナムでは西洋医学と並んで、東洋医学も多用されているが、その専門医は漢字漢文の知識も必要であり、寺院などでも漢字が書ける人物が重用されている。

17）“Hiện tình thầy giáo nhà quê”,『学鐘』, no.7, 1928.

18）“Một số thầy giáo đến làm Đốc một trường sơ đẳng làm thế nào cho đông thêm học trò”,『学鐘』, no.9, 1929.

19）“Hiện tình thầy giáo nhà quê”,『学鐘』, no.7, 1928.

20）“mấy lời trần tình của một thầy giáo thôn que”,『学鐘』, no. 7, 1929.

21）[岡田2010]、13頁より引用。

22）“Liste des membres”,『学鐘』,no.18, 1931.

23）“Chữ quốc ngữ cần viết cho nhứt định”,『学鐘』, no.7, 1928.

24）“Quelques Suggestions”,『学鐘』, no.5, 1928.

25）“Quelques Suggestions”,『学鐘』, no.5, 1928.

26）“Vấn đề Nông phố”,『学鐘』, no.11-12, 1929.

27）“Quelques suggestions”,『学鐘』, no.5, 1928.

28）“Những đều nên biết trong việc dạy hội hoạ ở trường sơ học”,『学鐘』, no.20, 1932.

29）“Une Idée –Les enfants et les contes–”,『学鐘』, no.18, 1931.

30）[Kelly 2000] p.120.

31）“Quelques suggestions”,『学鐘』, no.5, 1928.

32）“Vấn đề quốc văn”,『学鐘』, no.7,1929.

33）“Trách nhiệm của ta”,『学鐘』, no.7,1929.

［参考文献］

今井昭夫、「ベトナムの言語と文化―クォックグーの発展とナショナリズム―」小野沢純編著『ASEANの言語と文化』、高文堂出版社、1977年：197-235頁。

岩井美佐紀、「土地改革期における北部ベトナム村落の変容―村落内の社会関係を中心に―」『地域研究』（東京外国語大学）第9号、1922年：64-116頁。

岩月純一、「近代ベトナムにおける『漢字』の問題」村田雄二郎他編『漢字圏の近代ことばと国家』、東京大学出版会、2005年：131-147頁。

岡田友和、「フランス植民地帝国における現地人官吏制度」『史學雜誌』第119編第6号、2010年：1-35頁。

黒澤和裕、「ベトナムにおけるフランス植民地教育―現地人教育改良評議会を中心に―」『二十世紀研究』第3号、2002年：75-98頁。
嶋尾稔、「ベトナム村落と知識人」伊原弘他編『知識人の諸相―中国宋代を基点として』、勉誠出版、2001年：107-117頁。
嶋尾稔、「ベトナムの伝統的私塾に関する研究のための予備的報告」『東南アジア文化交渉研究　別冊』第2号、2008年：53-66頁。
白石昌也、「20世紀前半期ベトナムの民族運動」池端雪浦他編『岩波講座東南アジア史第7巻　植民地抵抗運動とナショナリズムの展開』、岩波書店、2000年：189-212頁。
近田政博、『近代ベトナム高等教育の政策史』、多賀出版、2005年。
古田元夫、『ベトナム人共産主義者の民族政策史―革命の中のエスニシティ―』、大月書店、1991年。
Phan Trọng Báu, *Giáo dục Việt Nam thời cận đại,* Nxb. Giáo dục, 2006.
Trần Thị Phương Hoa, “Các cải cách giáo dục và khủng hoảng của nhà trường Pháp-Việt ở bắc kỳ cuối những năm 20, đầu những năm 30 của thế kỷ 20” *Di sản lịch sử và những hướng tiếp cận mới.* Nxb Thế giới, 2011.
Kelly, Gail Paradise, *French Colonial Education : Essays on Vietnam and West Africa*, AMS Press, 2000.
Marr, David G, *Vietnamese tradition on trial, 1920-1945*, University of California press, 1981.
Trinh Van Thao, *L’ecole francaise en indochine*, CNRS, 1995.

［史料］

Đông Dương tạp chí（インドシナ雑誌）, 1913～1919 (欠号あり).
Tiếng chuông Nhà học（学び舎の鐘）,1928～1936 (欠号あり).
『百穀社通信』、ベトナム村落研究会、8号～12号、1998～2002年。
Gouvernement général de l’Indochine, Trung Tâm Lữu trữ I, phông Toàn quyền Đông Dương（Gouve,TLQG I, TDDと表記）

（大学院修士課程修了）

SUMMARY

Elementary Education in Vietnam under the French Colonial Rule:
Focusing on Native Teachers' Activites in French Vietnamese Schools

Wakana Saito

This article, focusing on the activities of native teachers, considers elementary education in Vietnam under the French colonial rule. Thinking about the activities of local teachers, I focused on the position of the "Chinese classics teacher" who safeguarded the traditional Confucian education in Vietnam prior to French colonization, and on the knowledge of Chinese writing and Chinese characters.

Thereby, even though they are both teachers, I found that Chinese classics teachers and native Vietnamese teachers in schools under French colonial rule had some different characteristics and played a different role. Chinese classics teachers have knowledge of Chinese writing and Chinese characters and were not just "teachers" but also had an important role in the Vietnamese villages as experts in "医儒理数", a Chinese term which comprises of medicine, Confucianism, feng shui and fortunetelling. On the other hand, even though native teachers of French Vietnamese schools were working in the villages, their salary was paid by the French government, which put them in the precarious position of not being able to rely on both France and their village.

Such native teachers were not acting as the exact 'communicators' of the colonial curriculum France had expected, but they were trying to implement adjustments of the French style education more suited to Vietnam and diversifying education according to region.

In conclusion, by focusing on the activities of the native teachers during the French colonial period when modern education was introduced, it became clear that not only a change from the old Chinese classical knowledge system to the new Western knowledge system had taken place. A triangular relationship of modern Chinese knowledge, Vietnamese knowledge produced by the quoc ngu and Western knowledge was formed in the French colonial period. Vietnamese knowledge produced by the quoc ngu and Western knowledge was formed in the French colonial period.